

社会教育とNPOの連携 パート1

小熊 浩典（松戸市社会教育委員，NPO こばてい代表）

松戸市社会教育計画策定支援業務における「社会教育とNPOの連携」というテーマを考える時、改めて「社会教育」と「(NPOが取り組む)市民活動」についての整理から始めたい。

「市民活動」は、市民の多様化するニーズに対し社会がどう応えるかという課題に対して、既存の行政だけではリソース・専門性が足りない現実を乗り越えるために着目されている、市民が主体を担う活動（事業）である。「市民活動」は、内容が「市民にとっての豊かな公共サービス」、主体が「民間（市民）」だと定義できる。

一方、「社会教育」は狭義には今回のような計画に基づく行政施策を指すが、本来的には市民が享受すべき教育サービスを、家庭教育・学校教育と並べて分類したもので、その主体は行政（社会教育行政）・民間（社会教育団体）ともに存在する。「社会教育」は、内容が「市民が享受すべき教育サービスの一部」、主体は「行政」「民間」共に存在するものだ。

一旦このような整理をしてみると、大きく2つの課題が存在する。

ひとつは「社会教育」と「(NPOが実施する)市民活動」には、上位概念である「市民への豊かな公共サービス」の一部である「社会教育」をより豊かにするために、どのように「社会教育行政」と「市民団体（NPO・社会教育団体）」が連携すべきか、というマクロな視野・文脈が、行政・NPO・社会教育団体各々に認知されているとは言い難いのではないかと。

もうひとつは、現場的・具体的な課題として、市民活動や協働の文脈でよく語られていることだが、行政と民間が互いのことを知らず、行政の政策決定において市民との意見交換がほとんど進んでいないことが課題と言える。社会教育分野においても、社会教育行政が何を担い、どういった機能を有するのかを社会教育団体もあまり知らず、また、社会教育団体の活動ひとつひとつを行政がよく知らない（知るための「仕組み」がない）と言えよう。

では、この「①公共サービスの一部である社会教育を、行政・市民が連携して実現するという視野の獲得」と、「②行政・市民が連携するにあたって必要な、互いの取り組みを知る機会をつくる」という2つの課題に対し、どんな取り組みが有効であるか。

①の課題に対しては、行政が、市民との役割分担を「施策として」位置づけることだ。公共サービスとしての社会

教育は、行政が一元管理・一斉実施するのではなく、民間が提供する社会教育（事業）と一体となって市民サービスを提供していくという、ある種パラダイムシフトとも成り得る位置づけができれば、市民がより誇りと責任を持って社会教育活動を公共として担い、行政と民間の対話も進むことになるだろう。結果、行政も自らにしかできない事業へ資本の集中投下が可能になる。

②の課題に対しては、各種公共分野のうち社会教育行政においても、社会教育を担う団体（社会教育活動に合致する活動をする者、とここでは考える）の活動を把握し、団体との交流を図る仕組み、必要があればインセンティブを作ることだ。

この2つの課題を解決するための具体的な事業として、以下を提案する。

①の課題に対し、行政の社会教育事業を市民に知ってもらう「社会教育行政を知るプレゼンテーションフォーラム」を実施してはどうか。いま行政が何に取り組んでいるのか、全体像を知る機会はなかなかない。会場で「これこそは行政にしかできない！」と思う事業へシール投票などを行えば、市民からの事業の支持・生の声を拾うことができる。また、プレゼンテーションの機会は、行政にとっても市民が事業を知り参加してもらう機会となると同時に、市民への説明責任を直接果たす、一定の緊張感をもたらし、行政サービスの質に寄与するだろう。

②の課題に対しては、イベントの企画や運営など、既存のものでもかまわないので、事務局としての動きも一緒に協働するような公募をかけてはどうか。例えば、私自身も携わった「だいすき松戸！子どもフェスティバル」は、市民活動団体がつくる実行委員会が事務局を担い、市が共催となって会場確保や広報——学校へのボランティア・参加者募集などを担う役割分担が次第に完成した。一緒に事業を組み立てる中で試行錯誤していく過程を通じて、相互の信頼関係と、地域における継続的な関係性を考える土台ができるのではないかと。

他にも、社会教育登録団体制度の運用を一部変え、活動報告を写真など含め、より細かく出してもらう仕組みと、インセンティブ（減免制度の段階的適用）などを工夫することで、行政職員が団体活動へ訪問する機会をより積極的に設ける必要はあるものの、生きた情報が集まる期待ができる。

上記の子どもフェスティバルをはじめ、私自身が松戸の社会教育にいくつか関係し、また市民活動へ参画してから10年程度ではあるが、いち市民として、少しでも現場的知見を本研究報告を通じて、社会教育施策に寄与できれば幸いだ。

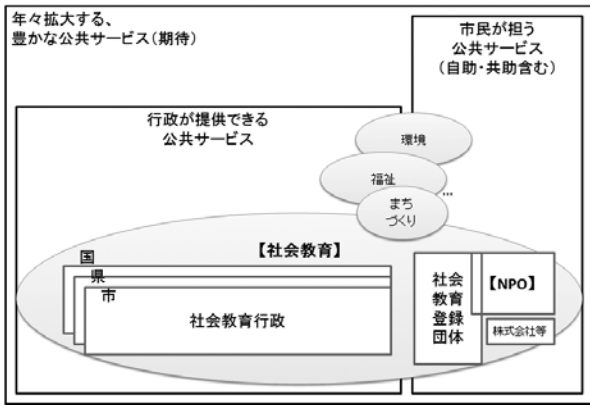


図1：年々拡大する、豊かな公共サービス（期待）
注：筆者作成



筆者が代表をつとめる、NPO こばていが実行委員会形式で開催・参画する、子どもフェスティバル企画合宿の様子



子どもフェスティバル当日の様子